「100%の人の業と、100%の神の業」

使徒言行録 1章21～26節

「そこで」と、今日の聖書の箇所は唐突な響きで始まります。それは、21 節～26 節が 12 節から始まる大きな話の一部だからです（注：2018 年刊行の「聖書教会共同訳」は「ですから」）。その大きな話とは何かと言うと、12 節のタイトルの「マティアの選出」で、ユダの死によって空席になっていた使徒の穴を埋めるために、マティアが選ばれたというのが今日の聖書箇所の内容です。ここでもう一度、12 節から始まる話の内容を振り返ってみましょう。

復活の主イエスは 40 日の間、使徒たちと行動を共にした後、「聖霊が降ると、あなたがたは力を受けて、地の果てまで私の証人となる」という約束を残して、天に帰ってゆかれました。残された使徒たちは主イエスを見送った後、エルサレムに戻り、従がって来た婦人たちやイエスの家族が待つ家の二階で一緒に心を合わせて熱心に祈っていました。その祈りの輪の中で、弟子の筆頭ペトロが立ち上がり、次のような提案をします。「主を裏切った 12 使徒の一人ユダが自ら命を絶ったので、その働きに空席が出来た。旧約聖書によれば『その務めは、ほかの人が引き受けるがよい』と教えているので、我々は新しく人を選んでその穴を埋め、主から託された働きを続けなければならない。」。これが、今日の 21 節の「そこで」の前段です。

新しく人を補充してまで埋めなければならない「その務め」とは、復活の主イエスが使徒たちに託した働き、すなわち「地の果てまで、主の証人となる」という務めでした。「主の証人」は文字の通り、「主イエスを証しする人」のことです。主イエスが行なったことを自分の目で見、実際に起こったことを、又聞きではなく、自分自身が体験したままを確信をもって語る人。つまり、主イエスが十字架にかかったこと、死から復活したことの目撃者を指して「主イエスの証し人」と呼びます。そしてこの「主イエスの証し人」は、言葉でそれを「語るだけ」に留まらず、「主イエスにおいて見たこと、主イエスから聞いたこと」をそのまま自分の生き方として生きる人でもありました。それは、使徒言行録を書いたルカが自分の福音書で述べている通りです。ルカによる福音書 9 章 1 節以下によれば、主イエスは御自分の働きのために 12 人を「呼び集め」、2 節「神の国を宣べ伝え、病人を癒す」働きを委ねて、そうできるように力と権能を与えて、送り出したとあります。

使徒たちに託された「主の証し人」の「務め」は、実に重要な働きでした。「委ねられた」とは、具体的なあれやこれやを「任された」だけではなく、その務めを託した人の心や思い、祈りをも同時に「委ねられた」ということでもありましょう。このように使徒の働きの重要性を考えれば考えるほど、ユダの穴を埋める人はそれなりの人が期待されました。誰でも良いと言うわけには行きません。しかしそうならば、そのように大切で、誰でもよいと言うわけには行かないのであれば、主が生前、御自分で直接選んだ弟子達がまだ 11 人も残っているのですから、その人たちに任せても

良さそうなものです。しかしペトロは断固として、12 人を揃える必要を訴えます。

聖書の「12」という数字は、主の弟子の数として私たちにはなじみの深いものです。しかし実は、それ以外の意味が「12」にはあります。主イエスは弟子を選ぶ時、15 人でも 15 人でもなく、12 人を選んでいる。それが主にとって大切なのでした。「12」はイスラエル民族にとって欠けのない全体をあらわす数です。つまり「漏れなく網羅されている」ことを表す数字でした。旧約聖書によれば、ヤコブには 12 人の息子がおり、この息子たちを父祖としてイスラエルの 12 の部族が出来たとあります。モーセは、これから入る未知の土地アモリ人の地を前にして、イスラエルの全部族から一人ずつ選んで 12 人から成る偵察隊を作り、派遣しました。荒野の旅の途中、エリムの町で見つかった井戸は 12 ありました。主イエスが１２人の弟子を選んだもの、このように旧約の時代からイスラエル民族に大切な意味合いを持つ数と知ってのことであったに違いありません。ことを始める時に 12 の数が揃えられていました。そしてご自身の働きを始めるにあったっても、イスラエル民族全体の救いを視野に入れ、働きが漏れなく万全に行なわれるように、その祈りと願いを込めて弟子の数は 12 でなければならなかったのではないでしょうか。ですからペトロもまた、主イエスが天に上げられ、これまでのように自分たちの傍らに居ない今、委ねられた主の働きを始めるその時に、「11」人のままではなく、「12」人を揃えて万全の備えをして事に当たる必要を見ていたのだと思います。主イエスがなさったように、自分たちも 12 人で「証し人」の働きを始める。ペテロがユダの後継者を提案する時、これこそが心の中にあったことと思います。

では「そこで」、この空席を「誰が」埋めるか。それを「どうやって決めるか」。二つの大きな問題が立ちはだかりました。今日の聖書箇所が投げかける問題提起です。繰り返しになりますが、ユダ亡き後、空席になっていた使徒の穴を埋めるのは誰でも良かったわけではありません。また「頭数を揃える」ということでもありません。「主の復活の証人」に相応しい人物が後継者として必要でした。では、その「相応しい」とは、一体何を指すでしょうか。ペトロはそれを説明して、このように言います。21 節から 22 節「主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、ヨハネの洗礼から天に上げられるまで、『いつも　(all time)　一緒にいた者』でなければならない」と。主イエスが生きている間、主イエスや自分たちと「いつも、一緒にいた人」にこそ、「主の復活の証人」の穴を埋めるべき人物でなければならないと言います。

さて「いつも一緒にいる」とは、どのようなことを指すでしょうか。新約聖書が「一緒に」、「共に」という時、それは単に「誰かと一緒に時間と空間を共有する」以上のことを指しているように思います。私は仕事柄、一度に 60 人ほどの学生に 90 分の講義をします。以前は 120 人を相手にした時期もありました。その間、私も学生も同じ場所に、同じ時間、同じことのために「一緒に」います。物理的には一緒です。しかし、そのような経験は、多くの学生にとって、また教師の私にとって、「私たちは、あの日、あの時、あの所で一緒にいた」、「共にいた」というある種の感動を伴った事になりにくいのではないかと思います。そして実際、そのような実感もなければ、それが何か特別なこととしてずっと私たちのうちに残ることはあまりないように思うのです。街に出て、大

勢の人々と一緒に信号を待ち、信号が青になって横断歩道を渡る時、同じ場所で、同じことのために、同じ時間一緒におり、同じ行動をしますが、これもまたただ「一緒にそこにいた」だけのことです。同じ場所で、時間を共に過ごしてもそれだけのことであれば、特別意味のあることとはなり得ません。

では、聖書は「一緒に」を、どのようなこととして語るでしょうか。少し抽象的ですが、人と人との人格が触れ合う、ぶつかることを指しているのではないでしょうか。誰かと物や仕事ばかりではなく、痛みや喜びも分け合う。同じ運命を分かち合う。そのようにとても近い間柄を、新約聖書では「一緒に」、「共に」という言葉で表現しているように思います。「人と人との人格が触れ合う、ぶつかる」とは、おそらく「一緒にいる」時、その人の人としてのあたたかさや優しさ、誠実さや謙虚さ、また厳しさが伝わってくる。その人の悲しみや怒りが自分の心に突き刺さって、まるで自分のことのように痛む。「一緒にいて」心が暖められ、傷が包まれ、感動で心が震える。そのような交わりを、新約聖書では「一緒に」と言うのではないかと思います。ルカが福音書で書いたように、エマオを歩いていた二人の弟子に復活のイエスが語りかけた時、「心が燃えた」(ルカ 24 章 32 節)、そのような「ぶつかる」近さが「一緒に」ではないでしょうか。ペトロが「使徒の働きに新しく加わる人は、主イエスの洗礼から天に上げられるまで、いつも一緒にいた者でなければならない」という時、それは主イエスに付き従い、イエスのそば近くにいて、行く先々で様々な事柄が起こった時々に「いつも一緒にいて」、驚いたり感動したり、苦しんだり痛んだり、または絶望したりということを「分かち合った人」こそ、ユダの後を埋めるのに相応しいと言うのでした。

しかしながら、たとえそのように実際に主イエスと共にいたとして、果たしてその人が主イエスと共にいた間、どれだけ主イエスの痛みや喜びを分かち合うことが出来ていて、主イエスと同じ運命を共にする覚悟があったかどうか。それはわかりません。いつも主と共にいた 12 弟子でさえそうではなかったので、主イエスは度々、「まだ解らないのか」と弟子たちの理解のなさを叱責されました。であれば、新しくし使徒として選ばれようとする人もまた、どれほどの「深さ」で主イエスと「いつも一緒」であったのか、確かなところがわかりません。しかし、そうであっても、この時のペトロにとっては、「主イエスの洗礼から天に上げられるまで、いつも一緒にいた人」がどうしても必要でした。イエス・キリストの証し人は、直接主イエスを知り、その働きを見た人でなければならない。それが使徒として欠かすことの出来ない最低限の資格、大前提でした。

実は、新約聖書で使徒として登場する人がすべて、ペトロの言うように、直接、生前のイエスを親しく知っていたわけではありません。その代表がパウロです。パウロは復活の主には出会っていますが、ペトロが使徒の資格とした、「主イエスの洗礼から天に上げられるまで、いつも一緒にいた人」ではありません。であれば、どうしてここでペトロは、ユダの後継者は地上にいた時のイエスを知っている人でなければならないと言って、譲らなかったでしょうか。

ここで、第 1 章の復活のイエス・キリストの言葉に戻ってみたいと思います。7 節以降で主イエスは弟子たちに働きを託す時、「天の父から聖霊が降る時、あなた方は力を受けて、エルサレムばか

りでなく、ユダヤとサマリア全土、また、地の果てに至るまで、私の証人となる」と言われました。これは、主イエスを証しする業がまず「一緒にいた」使徒たちから始まるという宣言に他なりません。主イエスから賜わった力と権能によって、「神の国を宣べ伝え、あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気を癒す」働きが他の誰からでもない、いつもご自分の傍にあった使徒たちから始められるというのです。聖書は、教会が誕生し、教会の働きが始まるのは主イエスの業が行なわれるためであるとを教えます。そしてそれがペトロが言う「主イエスの洗礼から天に上げられるまで、いつも一緒にいた人」によって始められる。復活の主ご自身はこのことを残された 11 人の使徒に語られたのでした。ペトロは、ここに立って、ユダの後、使徒の働きを引きうける人は、残された自分たち 11 人と同じように地上にあった時の主イエスを知っている人でなければならないと信じたでしょう。

さて、ここにその条件を満たした人が二人おりました。一人は「バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフ」、もう一人は「マティア」です。一人であれば何の問題はありませんでしたが、一人以上いる。どちらを選んで、どちらを選ばないか。今も昔もこれは問題です。この時、いわゆる「人間の常識」によれば、まったく人間的な基準で選ぼうとすれば、勝負は初めから決まっています。間違いなくヨセフが選ばれます。

私たちは時折、過去の職歴や、現在の肩書が所狭しと並べられた名刺を目にすることがあります。それと同じようにここではヨセフの場合、合計３つの名前で紹介され、それによってヨセフという人の確かさを表わそうとしています。まず「バルサバ」は「安息日に生まれた子」という意味で、純粋なユダヤの家系の人間であることを表わします。「ユスト」はラテン語の名前で、ローマ市民の血統にあることを示しています。言い伝えによればこのヨセフは、当時、ローマで名の知れた名門の出であり、親族に初代教会の有力者がいたと言います。家柄も教養も申し分のないヨセフの姿が浮かび上がります。「この人こそ使徒として相応しい」と言わんばかりの紹介のされ方です。

想像するのですが、この二人が候補者に選ばれた時、人々の中には内心、初めからヨセフに軍配を上げた人も少なからずいたでしょう。しかしそれに比べマティアは、「ヤハウェの賜物」という名の持ち主だということしか記されません。新約聖書にもここで一度だけ出てくる、何となく華のない、地味な人物として登場します。両者とも、ペトロのいう使徒の条件を満たしてはいますが、世間のものさしでは「比べ物にならない」。これがマティアでした。

ところが、「心を合わせて、熱心に祈っていた」人たちは、大切な使徒を選ぶ時、家柄や学歴、人脈や社会的地位というような人間的なあれこれとは、まったく関係のないところで選ぼうとしました。そしてその方法は、先祖たちも行なってきた「くじ引き」です。肩透かしを食らうような原始的な方法です。私たちは、決着のつかない時、先が見えない時、また自分で責任を取りたくない時、「運を天に任せる」思いでくじを引きます。しかし、イスラエル民族はことが大事（おおごと）であればあるほど、そこに人間的な思い入れやしがらみが強く絡まる事であればある程、その決定を自分の手から離して、神のみこころを求めて、くじを引いてきました。自分の手に握っておきたい、自分の手でどうにかしたいと思うものほど、自分の手から離して神に委ねる知恵を形にしたその方法の一つが

「くじ引き」でした。「どちらに転んでも文句は言わない。主に委ねた」という立ち方です。

イスラエルの民は、できる限り人間的な思いを捨て、神の導きとみこころだけを求めてそのぎりぎりのところで「くじ引き」を選びました。決して無責任に、運を天に任せたのではありません。むしろその逆です。「くじ引き」に込められたのは、イスラエル民族の神への信頼と信仰の現われではなかったでしょうか。イスラエルの民にとって神は、いるかいないか判らない霧のようにぼんやりした存在ではなく、実にハッキリした意志を持ってご自分の方から人間に手の差し伸べて救い出される生ける神でした。「混沌と闇」の中に「光あれ」と言われて光を造られた神。民が奴隷の地エジプトにあった時にはその嘆きの声を聞いて導き出し、バビロン捕囚の苦しみと絶望にあった時には、自ら同伴者として民と一緒にその苦しみと絶望の中を歩まれた神。人の目には値打ちも価値もないと見えるところに、ご自身の眼差しを注ぎ込む神。正義と公正をどこまでも真っ直ぐに貫く神。厳しいまでにご自身と隣り人を愛すことを求める神。イスラエルの民は、ユダの後継者を選ばんとしているこの人たちは、「どっちに転んでも」そのような神を信頼し、前へ進むつもりだったでしょう。

イスラエルの民は、そのような神の前に、人の目には見えなくても、確かに内に渦巻く人間的なしがらみや野心を、不安や期待を、賞賛や評価への渇望を、人間の基準にあう「良いもの・悪いもの」をすべて差し出して、いわば自分自身を「丸腰」にして神の前に立つことの正しさを父祖たちから学んで、自分たちもそのように歩もうとして来たのですし、実際、そう生きて来たのではないでしょうか。ですから、人生を左右する節目に、自分ではどうしようもできない事に直面した時に、生きて働かれる神を畏れ、その神の方に体を向けて来た。そうして出た結果を、神の選びとして受け取って来たのでした。そこには、その中に神が入り込んで伴ってくださるとする人間の信頼があります。

「くじを引く」こと自体は人間の業です。いかに誠実に、自分の思いをゼロにしてくじを引いたつもりでも、それは人間の業を越えることはできません。しかしながら、くじの結果を神のみこころとして受け止めるのも人間の業です。私たち人間が行うすべてがそのまま、曇りも歪みもなく神のみこころを 100%映しているという確かな保障はありません。100%正しいのは神ご自身だけです。人間的に見て、精一杯に真摯で、誠実で、真っ直ぐな業であったとしても、神の前では実に不完全で、貧しいものであるに違いありません。

確かに私たちは、自らの選ぶところに従がって、自らの責任で始め、それを誠実に進めようとします。真剣に祈り、「これが正しい」という信じることなしに進むことはできません。ですが、そのように行なわれた私たちの業であっても、私たちにはどこかに破れやひびを帯びています。罪の影を宿しているかもしれません。「正しい者はいない。一人もいない」と、パウロがローマ信徒への手紙で告白している通りです。ですから、私たちは最終的には神に信頼を置くしかありません。私たち人間の欠けと歪みを貫いてなお、神はこの罪人の私をさえ用いて、ご自分のみこころをなされるに違いないと祈り、信頼を置きます。このように、私たちは、神の大きな恵みの手の中で 100%の

人間の業を 100％神に委ね、精一杯、励むことが赦されているのではないでしょうか。

ヨセフとマティアのうち、一人を選ぼうとしている今日の聖書の人々も、このような思いで「くじ引き」を行なおうとしたのではないかと思うのです。ですから 24 節にあるように、それは祈って始められました。自らの小ささ、貧しさを知らされる者は、何かを始めるにあたり、神の前に静まり、謙虚に神の導きと支えを祈らずにはおれないからです。人々は、「すべての人の心をご存知である主よ。この二人のうちどちらをお選びになったかを、お示し下さい。」と祈って、くじを引きます。

そして、くじはマティアにあたりました。この結果を喜んだ人、がっかりした人、両方あったでしょう。家柄も教養もヨセフに劣りましたから、その後、使徒としてのマティアに失望したり、「この人ではなくヨセフだったら、どれ程よかったか」という場面もあったかもしれません。しかし、信仰においてくじの結果を神のみこころとして受け取り、従がうこと決めた時、たとえ将来、「この人ではなくヨセフだったら」と思わせる出来事が起こっても、再び主の前にすべての人間的な思いを注ぎだして、知恵と導きを求める覚悟でマティアを弟子として受け入れ直し、共に生きていったに違いないし、それしか道はなかったと思います。

主イエスは、「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、わたしの目には不思議に見える」と言われました。パウロも神の知恵と力について、「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています」と告白しました。マティアが使徒に選ばれるという、ある意味、人の世の常識を超えた「想定外」の結果から、主イエスを証しする働きが広がりました。人間のあらゆる予想や思惑を超えて、世の評価と期待から遠い人マティアによってユダの空席は埋められ、使徒の働きは引き継がれ、教会が始められました。このことは深い事です。私たち人間の目に映る不思議、主の深い知恵によって始められた出来事でした。教会も、教会の働きもそこから始まったことを、本日の聖書は私たちに教えているのではないでしょうか。

いつも、まず先に主イエスの方から私たちに近寄り、寄り添って下さいます。私たちが「あなたを愛します。あなたと共におります」と言えるのは、まず主イエスの方が私たちにそうなさってくださるからです。信仰は実にここからしか始まらないのだと信じます。まず主ご自身から、私たちと共にいて下さる約束を受け入れることから始めたいと思います。願わくは、復活の主が、固く握りしめた私たちの手のひらを開き、そして私たちが主イエスの手を握って共に歩ませて下さいますように。

【祈り】

「神の前で、神と共に、神なしに生きる」と言う不思議な言葉を残して、死にいたるまでその言葉通りに生き抜いた信仰の先達がおります。

そこから私たちは、あなたを深く信頼し、あなたの赦しと恵みによる審判を信じ委ねて、精一杯生

きるべきことを学びます。
どうか私たちがあなたを信じるがゆえに、やって来ることや起こって来ることを信仰の目で見、信仰で持って受け取り、あなたの大きな慈しみ深い御手の中で、導かれて歩むことを得さして下さい。
主よ、今、世界中は緊張と怒りと悲しみの中におります。共にあって、分かち合って下さい。戦火に怯える人々、その中でキズを負い、ベッドに横たわる人々がおります。
主よ、どうかあなたが、これらの人々と共に、その家族と共にいて、分かち合って下さい。
この戦いに反対し、声をあげ、実際に戦う世界中の多くの人々と共にいて下さい。
そして、なによりも、この戦争を行なっている人たちとも共にあって、
あなたの平和へと導いて下さい。
我らの十字架と復活の主、イエス・キリストの御名で祈ります。
アーメン